

更級日記「あづまぢ」小考

田 中 新 一

「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という冒頭の自己紹介文は、更級日記を読む人々にとつて、最初に越えなければならぬハードルであり続けている。それというのも、この一文の背後に隠された、

あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな (古今六帖・三三六〇)

の引歌の存在が、誰の目にも明らかだからである。

「あづまぢの道のはて」に「常陸」を読み取ることには異議のあろう筈はない。問題は、「よりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という自己規定である。作者菅原孝標女は、父の上総介任官によって、上総国府に十歳より十三歳の少女期を過ごした。従つて「なほ奥つ方」とは「上総」を指している。ところが、古代律令官制下、上総国は東海道に属しており、その上総が「あづまぢの道のはて」つまり東海道の終極常陸国よりも「なほ奥つ方」にあるという表現は不審、という観点に発する旧来の諸説を、森田兼吉氏は次のように分類整理された。^(注1)

1 作者の思い誤り。

2 引歌から来る自然の文勢でこう書いたもの。

3 上総は「あづま路の道の果てよりもなほ奥つ方」と言ってもよい認識が当時にはあった。

4 A 上総が辺境の地であることの強調。

4 B 常陸は作者が思慕していた浮舟登場の地。そこよりもさらに草深い奥地からおほろに三人称化した自己を登場させる虚構。

1説は可能性にとどまり、2説(宮田和一郎氏・曾沢太吉氏・関根慶子氏)は説得力に乏しく、3説(特に、長沢聡子氏)には反証があまり、4 A説(玉井幸助氏)は虚構説として4 B説(犬養廉氏)に吸収されたとして、結論的には犬養説を一部条件付きで支持された。

「無理な合理化よりも、冒頭の虚構をすなおに認め、むしろ、その虚構の意味を探るべき」として「東路の道の果て、すなわち常陸は作者懂れの浮舟登場の地。同じ常陸介の娘とはいえ、八の宮の姫君たる浮舟と彼女とでは、その出自において雲泥の差がある。従って、浮舟よりも更に草深い奥地から、おほろに三人称化した自己^(注2)を登場させ、『いかばかりかはあやしかりけむを』と、自嘲めいた言葉を添えて筆を起こした」という、犬養説は、作品全体に互って十分目配りされており、妥当な方向性を持つ卓説として、後述のごとく、筆者も支持したいと思う。但し、その虚構論支持の前に、検討しておきたいことがある。すなわち、従来説のすべての基礎にある「あづまち」意識についてである。

◇ 自説叙述の前に、上掲第3説について、特に長沢聡子氏の論説について、一言しておきたい。氏の論説の要は次の通りである。^(注3)

日記冒頭文の地理上の疑問を究明する目的で、旧来の諸説につき、①どここの国に位置(所屬)するか、②その理由、の二点を軸に調査・整理した結果、「東海道という『線』と、その上に位置する二つの『点』の常陸と上総に議論は

集中している」とした。そして「常陸帯の引歌によって、あづまぢの道のはては常陸という論拠が成り立ち、そこより、諸説すべてが、上総が常陸よりも、その東海道の奥にあるとする」という纏めである。氏は、その上で、別の論拠を探り求め、作者が日記を書くに当たり、地図を参照した可能性を推論し、「行基図」と称される古地図の中でも記載事項の豊富な天正十七年写「拾芥抄」所載図では、東海道の行程を線で辿っており、その遠江―駿河―伊豆―甲斐―相模―武蔵―常陸―下総―上総―安房と辿る線経路を指摘するところから、上総は常陸よりも「なほ奥つ方」であつた、と結論付け、「上総は常陸よりも更に南にまがりこんでいるからこう言つたのだらう」とする阿部秋生氏・池田利夫氏の説を証明した。

しかし、平安時代における地図使用の実体が明らかでない現在、作者孝標女が古地図を参照して執筆したかという憶説をそのまま鵜呑みにする訳には行かぬし、また、傍証として採録されたいま一面の古地図、すなわち「二中歴」掲載の線路図は、「常陸の奥の上総」という認識を必ずしも立証するものとはなっていない。従つて、氏の斬新な試論は未だ熟したものとは言えないと思う。しかし、この「二中歴」の線路図は、後述のように、我々に貴重な知見を伝えて有益である。

さて、長沢氏の論攷中、注目すべきは、従来の諸説が「東海道という『線』と、その上に位置する二つの『点』の常陸と上総に議論は集中している」という所であろう。古代行政区域概念としての東海道や、あるいは、続いて書かれる東海道上洛記から、冒頭の「あづまぢの道の果て」を即「東海道の果て」と解するのが、長沢氏も含めて、旧來説のすべてだったということである。しかし、その従来の解釈は果たして妥当であらうか。

◇ 『平安和歌歌枕地名索引』（片桐洋一監修、ひめまつのかみ編）の「あづまぢ」の項に載る歌一五〇首の中、具体的地

名(歌枕)とともに詠まれていた歌例を各一首ずつ挙げると、次の通りである。(注4) また、同書に掲載された、その歌枕の推定国名を括弧書きで示し、異説として掲出された国名は併記した。(また、参考として、中世以来、広く活用された名所類題集『歌枕名寄』(古典文庫、吉田幸一・神作光一・橋りつ編)による国名を《》で補記した)

なこそこの関 (陸奥。能因―遠江) 《陸奥》

あづまちはなこそこの関もあるものをいかでか春のこえてきつらん (後拾遺集・三・師賢)

しら河の関 (陸奥) 《陸奥》

あづまぢの人にとはばやしら河の関にもかくやはなはにほふと (後拾遺集・九三・長家)

おいその森 (近江) 《近江》

あづまぢのおもひいでにせん郭公おいその森のよはのひとこそ (後拾遺集・一九五・公資)

うるま (美濃) 《美濃》

あづまぢにここをうるまといふことはゆきかふ人のあればなりけり (後拾遺集・五一五・重之)

あふさかの関 (近江) 《近江》

あふさかはあづまぢとこそききしかどこころづくしの関にぞありける (後拾遺集・七四八・道雅)

はばかりの関 (陸奥) 《陸奥》

やすらほでおもひたちにしあづまぢにありけるものはばかりの関 (後拾遺集・一一三六・実方)

したひもの関 (?) 《陸奥》

あづまぢのはるけき道をゆきかへりいつかたくべきしたひもの関 (詞花集・一八四・太皇太后宮甲斐)

ひたち (常陸) 《常陸》

あづまちの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあはんとぞ思ふ (新古今集・一〇五二・読人不知)

むさしの (武蔵) 《武蔵》

はるはまづあづまちよりぞ若草のことはつてよむさしの風 (古今六帖・三八四)

いかほの沼 (上野) 《上野》

あづまちのいかほのぬまのかきつばた袖のつまよりいゝことに見ゆ (堀河百首・二六二・源頭仲)

つくばやま (常陸。八雲一相模) 《常陸》

あづまちやしらぬさかひにやどりして雲居にみゆるつくばやまかな (堀河百首・一三七〇・藤頭仲)

かひがね (甲斐) 《甲斐》

あづまちの人に問はばやかひがねのやまにもけふの雪やはつゆき (元永元年忠通歌合・一九・雅兼)

ふなきの山 (美濃) 《美濃》

あづまちのふなきの山のこのまよりほのかにみゆる夕月夜かな (元永二年忠通歌合・三〇・忠季)

ふはのせき (美濃) 《美濃》

あづまちやふはのせきどの曙にほのかにぞなくやまほととぎす (保安二年長実歌合・七・下野前司)

きよみがせき (駿河) 《駿河》

みつしほのひるまにすぐるあづまちやきよみがせきに紅葉しにけり (大治三年頭仲住吉社歌合・三・仲房)

ままのつぎはし (?) 《下総》

あづまちを朝たちゆけばかつしかやまのつぎはしかすみ渡れり (治承三年兼実歌合・四・頼政)

さのふなはし (上野) 《上野・近江》

あづまぢのさののふなはしかけてのみ思ひわたるを知る人のなさ (後撰集・六一九・源等)
ふじのたかね (駿河) 《駿河》

あづまぢのふじのたかねにあらねどもみかさの山も煙たちけり (公任集・二七)

いづ (伊豆) 《伊豆》

あづまぢにきてはくやしとおもへども伊豆にむかふぞうれしかりける (相模集・三二六)

ふせや (?。能因―信濃) 《信濃》

おろかにもおもはましかばあづまぢのふせやといひし野辺にねなまし (拾遺集・一一九八・読人不知)

ころもの関 (陸奥) 《陸奥》

あづまぢにたつひをだにもしらせねばころもの関のあるかひぞなき (顕綱集・三〇)

にげ水 (?) 《未詳》

あづまぢにありといふなるにげ水のにげのがれてもよをすぐすかな (散木奇歌集・一五〇三)

なるみ (尾張。五代―紀伊) 《尾張》

あづまぢやなるみののべに旅寝してよすがらききつ鈴虫のこゑ (重家集・二八二)

あひの中山 (?。能因―阿波) 《未詳》

あづまぢやあひの中山ほどせばみこころの奥の見えばこそあらめ (山家集・六九五)

せたのながはし (近江) 《近江》

ひつぎものたえずそなふるあづまぢのせたのながはし音もとどりに (兼盛集・一〇五)

あぶくまがは (陸奥) 《陸奥》

あづまちときくにいとどぞ頼まるるあぶくまがはに逢瀬ありやと (隆信集・六七二)

さらしな (信濃)

《信濃》

あづまちやくまなき月にさそはれていまさらしなに君は来にけり (経家集・九八)

しのぶのうら (陸奥)

《陸奥》

あづまちや都しのぶのうらみてもならはぬ波にかこつ袖かな (明日香井集・四三七)

てまのせき (?)

《出雲》

あづまちにありといふなるてまのせきとりとめがたき年のくれかな (明日香井集・五一四)

はまなのはし (遠江)

《遠江》

あづまちのはまなのはしをきてみれば昔こひしきわたりなりけり (後拾遺集・五一六・広経)

とつなのはし (陸奥)

《陸奥》

あづまちやとつなのはしもうちはへていくへの雪の下にくつらん (壬二集・二六六三)

あさまのやま (信濃・能因一駿河)

《信濃》

あづまちのあさまのやまにあらねどもおもひにもゆる胸ぞわびしき (相模集・五九二)

いさめのさと (?)

《ナシ》

あづまちのいさめのさとは初秋のながきよをひとりあかすわがなぞ (古今六帖・一三二)

いそねのはし (?)

《ナシ》

たゆとてもかくやはたゆるあづまちのいそねのはしのかけてだにあらで (惟規集・二九)

いはたのをの (山城・東国)

《山城・美濃》

いまはしもほに出ぬらんあづまぢのいはたのをのしののをすすき (金葉集・六八〇・伊家)

かほやがぬま (上野) 《上野》

あづまぢのかほやがぬまのかきつばた春をこめても咲きにけるかな (金葉集・七二・顕季)

きそのかけはし (信濃) 《信濃》

あづまぢのきそのかけはし春くればまづは霞ぞたちわたりける (堀河百首・四六・肥後)

さやのなかやま (遠江) 《遠江》

あづまぢのさやのなかやまなかなかに何しか人を思ひそめけん (古今集・五九四・友則)

すがのあら (信濃) 《信濃》

あづまぢのすがのあらのは初尾花いつまでものを思ひみだれん (隆房集・一六)

そのはら (信濃) 《信濃》

あづまぢのそのはらからはきたりとも逢坂まではこさじとぞおもふ (後拾遺集・九四一・相模)

たこのうら (駿河) 《駿河》

あづまぢのたこのうらなみ春たてば岸の上にさく花かとぞみる (能宣集・一八六)

たまさきのみや (?) 《ナシ》

かはやしる波に蛍のよるみればこやあづまぢのたまさきのみや (親宗集・三七)

ささのわたり (?) 《ナシ》

あづまぢのささのわたりはたましきの片端にだにあらじとぞ思ふ (相模集・一三九)

ときはのはし (?) 《近江》

いろかへぬ松によそへてあづまぢのときはのはしにかかる藤波 (金葉集・八一・大夫典侍)
 のじまがさき (淡路、近江、出羽とも) 《安房・淡路》

あづまぢののじまがさきの浜風にわがひも結びし妹が顔のみ佛にみゆ (千載集・一一六六・顕輔)
 むろのやしま (下総、下野) 《下野》

あづまぢのむろのやしまにおもひたち今宵ぞこゆるあふさかのせき (堀河百首・一一八一・隆源)
 もろこしさと (?) 《ナシ》

あづまぢのもろこしさとにおりてたつきぬをやからの衣といふらん (人丸集・二七〇)
 をだえのはし (陸奥) 《陸奥》

あづまぢのをだえのはしもあるものをいかに朽ちゆく袖とかはしる (順徳院集・六九〇)
 一覽してその大勢は判ることだが、試みに統計的処理を試みよう。異説なく確定的なものには一、異説あるものには〇・五を与えて、集計すると、以下のようなになる。

陸奥	七・五	信濃	五・〇	近江	三・五
駿河	三・五	美濃	三・〇	上野	三・〇
遠江	二・五	常陸	一・五	武蔵	一・〇
甲斐	一・〇	伊豆	一・〇	下総	〇・五
尾張	〇・五	相模	〇・五	下野	〇・五
★山城	〇・五	★阿波	〇・五	★淡路	〇・五
★紀伊	〇・五	?	一一・〇		

(★) 山城はともかく、阿波・淡路・紀伊があるのは、明らかな国名推定の誤りであることを示している。この数値を、令制東海道諸国と東山道諸国に分けて集計する。

□東海道 (伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸)^(注5)

☆「あづまぢ」とともに詠まれた右の東海道管内地名数 一二

□東山道 (近江・美濃・飛驒・信濃・上野・下野・陸奥・出羽)

☆「あづまぢ」とともに詠まれた右の東山道管内地名数 二二三

となつて、「あづまぢ」とともに詠まれた地名例は東山道の方が遙かに多い。両者の地理的条件を揃えるために、仮に陸奥・出羽を外したとしても、東海道一二に対して、東山道は一五となつて、まだ東山道が多めであり、両者に多寡の区別はあまり付かない。「あづまぢ」は両道いづれにも区別無く使つていたことが良く判る。

文学的世界では、「あづまぢ」は東国に通じる道であり、海道であろうが、山道であろうがよかつたのである。参考までに、現代の辞書に当たってみると、『日本国語大辞典』の解説

あづまじあづまぢ 【東路】①都から東国地方に至る道筋。東海道、東山道をさす。また、単に、東国をもいう。

②風俗歌 (くにぶりのうた) の曲名。

が正しいことが判る。



こうして、「あづまぢ」が「東国に通じる道」であり、その「はて」に常陸国があつたという認識が京人の一般であるということなら、現実の道路として、海道も山道も、ともに常陸に通じている必要がある。東海道に問題はない。東山道を東国に下り、信濃から上野・下野と東進した後、下野国府あたりで北方に道を変え、令制東山道筋から離れ

て、常陸国に通う道は現実にとこを走っていたのだろうか。

令制東海道筋の常陸国と令制東山道筋の下野国の両国府を結ぶ連絡幹線道路としては、次の三通りが考えられようか。

一、筑波山の北廻り路線

1、友部經由

2、大增經由

二、筑波山の南廻り路線

両国府の間に屹立する筑波山は、古代より此の地方の靈峰として広く人々の尊崇を集めてきた。どの方向から見ても美しい容姿を今に留めている。その筑波山の東と西に位置する常陸国府（現石岡市）と下野国府（現栃木市田村町）の往還は官道としても生活道としても必須のものであつたろう。大小種々の道筋が開かれていたと思われるが、そのうち最も多く使われていたのはどれだろう。

北廻り、南廻りの両路線のうち、北回りは距離は近いが山地にかかる。真壁經由の南回りは平坦地だが、山麓を迂回することになり、やや距離が遠い。古代官道は直線的で効率性を求めていたとする近年の研究^(注6)成果から判断すると、官道としては北回り路線が使われていた可能性が高い。木下良氏によると、

『常陸国風土記逸文』によれば、常陸国新治郡に大神駅があつた。同駅は岩瀬町平沢に比定されるので、この駅は下野国府に至る東山道との連絡路であつたと思われ、この駅路に沿つて下野にも少なくとも一駅があつたと思われるが、関係史料・資料は見当たらない。^(注7)

とある。大神駅經由の官道とならば、北回り路線となる。『常陸国風土記』新治郡名説明の条で「新しい井を治（八）

「とされた霊水の比定地、現真壁郡協和町の古郡付近に、旧新治郡家（郡役所）はあつたとされるが、これもその路線に比較的近い地点に当たることになるだろう。古代の新治郡は現在の^(注8)新治郡よりも北方に位置し、西茨城郡の西部山間地から真壁郡北方にわたる地帯で、筑波山の北方に当たっている。

北回り路線のうち、友部經由コースは、岩瀬町から東進して、友部町・岩間町を經由して現常磐線沿いに平坦地を南下することになるので楽だが、かなり大廻りになる。それに比して、岩瀬町から八郷町（ヤサトマチ）大増經由のコースは、峠越えになってやや苦しいが距離は大幅に短縮される。木下氏はほぼ此の路線を推定しておられるようであるが、私も現地を踏査してみても、最も信憑性の高い説のように思う。「古代の道路は直線道路だった」という最近^(注9)の古代道路研究成果に、国分僧寺・国分尼寺の側を官道は通っていたことが明らかにされた武蔵・肥前等の事例^(注10)を直結させて、常陸国府跡（石岡小構内）より常陸国分僧寺跡・尼寺跡に引いてみると、その先はまさしく八郷町に向かっている。大神駅つまり現岩瀬町平沢は、その延長線上にある。

こうしてみると、古代、東山道を東進して下野国府に入った人で、さらに東進して隣国常陸国府を志す人は、この大神駅（現岩瀬町平沢）を經由して、南下し、峠越えに八郷町大増を経て、国府石岡に向かったものであろうか。先述の「二中歴」の線路図^(注11)によると、下野と常陸を結ぶ路が明示されている。また、かつて三谷栄一氏は『日本神話の基盤』^(注12)で、常陸国と毛野国との関係や郡名配列などより「常陸は本来東山道か」と言われたことがある。上記の私の推論からも、その可能性はあり得ると思われる。

こうして「あづまぢの果て」としてたどり着いた常陸国府、石岡を越えたと、その道筋の先はさらに南に延びて、下総国・上総国に続いていた。この道筋を、作者の心の道に重ね合わせてみよう。

「あづまぢの道のはてよりもなほ奥つ方」を、作者の脳裏に浮かぶ文学的表現として読めば、素直に「上総国」と

読めるのである。父孝標は上総介の後、常陸介になった。又、夫橘俊通はその後、下野守、そして信濃守になった。作者晩年から振り返って親族の任国を手繰り寄せると、信濃―下野―常陸―上総と記憶に蘇る。行き着くところは上総であった。「あづまの道」の表現は、都より思いを馳せ晩年より回想してのことで、東国へ長々と続いていた道筋への思いであり、それは海道・山道を問う言葉ではない。寧ろ父孝標の赴任した上総・常陸、夫橘俊通の赴任した下野・信濃の国々を念頭に置いた東国意識であり、その長々と続く東国路の終着点としての常陸国、そのまた奥の国上総での生い立ちを思い返して、上京後も身内の東国赴任で幾度と無く東国を意識させられ、否応なく、心内、東国に関わり続けた我が人生の一代記を構想したのが「更級日記」であった。

こう読んでみると、この日記冒頭文「あづまの道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」は、犬養氏のいわゆる浮舟を意識した虚構表現という理解はそれでよいが、現実の作者心内の地理的叙述として読んでも、何の不審もなく受けとめることが出来、東国に終生関わり続けることになった作者の、自分の人生を想起しての今一つの文学的表現として十分理解できる表現であったと言えよう。

木村正中氏が日記文学の特性として挙げられた「事実と非事実とが境目なくつながっている特異な文学的世界」^(注13)といわれるものの空間的事例とでも言えようか。



「あづまち」の奥の又その奥の上総国に育った作者は、その後、父を奥の常陸国に見送り、更に夫をその手前の下野国に送り出し、その後、更に、その手前の信濃国に赴任させた、家庭的に見れば、これが作者の人生のすべてであった。意識としては東国に縛り付けられた人生であった。生れは都であれ、草深い辺地の辺地、上総での生い立ちが、自分の出自であり、いかに都に上り、都に生き続けようと、所詮、最終的には信濃守の妻まで、という悔恨、都人と

しての挫折、冒頭に続けた「いかばかりあやしかりけむ」は自嘲というよりは、真情の吐露のように思われる。東國育ちでも宮の姫として都の貴人に関わつた浮舟との落差を「よりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という形で自己規定せざるを得なかつたのであつた。

この冒頭文に続く東海道上洛の回想紀行は、こうした東國に寄せる晩年の複雑な心情によつて綴られている。秋山虔氏の「これ（この旅の記）は東國から京への実際の上京の道程を単に語つたのではなく、両者を架橋することによつて、晩年の作者の現在を問い、その人生の全図を納得しようとする営為であつた」といわれる内実はこういうことではないか。



以上から読めば、冒頭文に対応する卷末文は次の箇所であろう。犬養氏説(注15)より若干後、姨捨の歌までを考えた。それぞれ傍線で対応させてみよう。

(巻頭)

あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさませれど、わが思ふままにそらにいかでおぼえ語らむ、いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき折り申すほどに、十三になる年、のほらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

(巻末)

昔より、よしなき物語歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。……かうのみ心に物の叶ふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ。

さすがに命は憂きにも絶えず長らふめれど、後の世も思ふに叶はずあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、居たる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。……この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

甥どもなど、一ところにて朝夕見るに、かうあはれに悲しきことのちは、ところどころになりなどして、誰も見ゆることかたうあるに、いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおほえて、

月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむとぞ言はれにける。

【注】なお、『日記』には、これに続く若干の記述があるが、いずれも時間的経過がみられるので、追記補記の類とみておきたい。つまり、書名『更級日記』の由来歌たる「姨捨」の歌で、自己の現況を括ったと見るのがよいと思う。

1、「あづまちの道のはて」と「闇にくれたる姨捨」の引歌の対応

「あづまちの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」の憧れの人との出会いを求める少女期のロマンと、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」の孤独の悲嘆に暮れる現在の心との落差。常陸は父の任国、信濃更級は夫の任国で、受領の娘の作者にとつては否応なく終始東国に宿命づけられた人生舞台であった。

2、「なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と「心に物の叶ふ方なうてやみぬる人」の対応

「東国最果ての国・常陸の更に奥に育つた田舎人としての私」であつてみれば、「思うこと、願うこと何一つ叶わぬままに終わった私」も無理からぬ、という諦念の自己清算。

この(1)(2)を纏めれば、物知らぬ夢見がちな上総住まいの少女だつた作者は、上京して都人として人生は送つたものの、所詮は東国受領家庭の人として終始し、憧れの人との出会いも果たせず終いになって現世不如意の老境に沈んでいるが、今その出自を思えば無理もないことだつた、という心境である。

3、「世の中に物語といふもののあるるを、いかで見はやと思ひつつ」と「よしなき物語歌のことをのみ心にしめで」の対応

異郷にあつてまだ見ぬ京の物語を読みたいと熱望した作者は、上京してのち物語や歌の世界に一途に没頭し得たが、いまそれらは「よしなき(現世ノ役ニ立タヌ)」ものであり、一途な没頭を悔いている。但し、「…のみ…で」の構文であり、物語没頭の過去の全面否認ではない。森田氏指摘の通り、^(注16)物語志向を全く捨てている訳ではない点に留意する必要がある。

4、「葉師仏を造りて…身を捨てて額をつき折り」と「阿弥陀仏立ちたまへり…この夢ばかりぞ後の頼みとしける」の対応。

葉師祈願により上京と物語読みが叶つた自分だったが、その後の不信心の罪過を自覚させられ、わずかに阿弥陀来迎に極楽往生を期待する作者である。

この(3)(4)を纏めれば、物語読みを熱望し、信心によつてその願いは叶えたが、その後の信心を忘れて辛い現果を見た非を悔い改め、せめて来世の往生を願っている。僅かながら信仰の効験は今も期待している作者である。



以上の分析の結果、回想の冒頭文では、作者の捨てようにも捨て切れぬ東国受領階級意識の根深さと、これもまた終生捨て切れぬ物語や歌、即ち文芸への関心の強さが顕在する。

老境の今、来世に懸ける信仰に言い触れながらも、なお筆を執って書き始めたこの極めて文学的な日記の冒頭文に、離れられぬこの二つの想いが交錯している。都から遠い異郷に生い立った自分の身の程と、都の文芸たる物語や歌などに寄せる強い関心との間に広がる乖離を、終生にわたって思い知らされた作者の真率の心の流露が見られる。

「いかばかりかはあやしかりけむ」はわが出自に向けられた自省、「いかにおもひはじめけることにか」は物語への本源的な関心に向けられた執着、この二つのキーワードにそのすべての思いが込められている。

この出自に不相応な物語読みの願望を叶え得たのは、作者にしてみれば、現世利益の薬師如来への祈願であった。この祈れば叶えられるという信仰の靈験こそ、その後の作者の人生に大きな影響を及ぼし、その因果律により、願わしい現世の利益を得られなかったのもまた物語没頭故の不信心に起因するものと判断し、老残の思いに沈みながらも信仰心の回復によりせめて来世の救いをと、改めて阿弥陀如来に僅かな望みを繋いでいるのである。

冒頭文に読むべきものは、作者に抜きがたく染み付き、晩年まで遂に払いきれず反芻させられ続けた東国育ち意識、「あづまち」人意識の疎外的想念と、幼時に深く染み付いた文学志向の執念であろう。

続いて書き継がれた異常に長い上洛の記の底にもこれらの心情が脈々と流れている。本来京人の作者の帰京上洛記に、「東国故郷意識」や「故郷訣別の哀愁」を読みとる論者が多いのもその為であろう。^(注17)

注

(1) 『更級日記』論—冒頭部の虚構と執筆意図—(『日記文学研究』第一集・新典社)

- (2) 日本古典文学全集「和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記」(小学館) 解説58～60頁
 なお、津本信博氏『更級日記の研究』(早稲田大学出版部)にも浮舟憧憬を軸とする虚構説がある。
- (3) 「更級日記」「上洛の記」の一考察」(『日記文学研究』第一集・新典社)
- (4) 掲載歌の歌番号及び歌詞は新編国歌大観によって見直した。
- (5) 武蔵国はもと東山道だが、七十七一年東海道に編入されたので東海道に入れた。
- (6) 黒坂周平氏「東山道の実証的研究」(吉川弘文館) 56頁他
- (7) 木下良氏「古代の道」(一九九六年七月七日栃木県立しもつけ風土記の丘資料館開館一〇周年記念講演プリント)
- (8) 日本古典文学大系「風土記」(岩波書店) 37頁
- (9) 注7プリント所収の「坂東・山東の古代交通路想定図」及び、同氏「常総の古代交通路に関する二・三の問題」(『常総の歴史』第十六号)
- (10) 木下良氏編『古代道路』(吉川弘文館)
- (11) 注3論文190頁掲載図
- (12) 「日本神話の基盤」(塙書房) 528～531頁
- (13) 「日記文学の方法と展開」(『論集日記文学』笠間書院)
- (14) 新潮日本古典集成『更級日記』(新潮社) 解説139頁
- (15) 注2解説文60頁
- (16) 注1論文175頁
- (17) 工藤進思郎氏「更級日記」に関する一考察―上洛の記に見える地名とその記事をめぐって―」(『金城学院大学論集』国文学編第十五号)・遠田晤良氏「更級日記上洛紀行の形成―地理上の問題点について―」(『札幌大学教養部女子短期大学部紀要』第二十七号)・秋山虔氏「更級日記についての断章―東海上洛記をめぐって―」(『論集日記文学』笠間書院) 等数多い。

本稿の執筆において、資料の面で、栃木県立しもつけ風土記の丘資料館及び茨城県石岡市教育委員会の関係各位の御助力を得ました。厚くお礼申し上げます。

(平成八・九・九稿)